

第11回気象学史研究会「古典籍・古文書の自然現象記録を用いた気候復元と気候変動」 開催のお知らせ

気象学史研究連絡会

第11回気象学史研究会を2022年度春季大会に合わせ、下記の要領でオンライン開催いたします。

日時：2022年5月19日（木）18：00～20：00（春季大会第3日夜）

形式：オンライン（リアルタイム形式）

テーマ：古典籍・古文書の自然現象記録を用いた気候復元と気候変動

趣旨：日本では、歴史文書に記録された天候情報などを用いて気候復元研究が行われてきた。その中でも、桜の開花時期に代表される植物季節や湖の結氷日に関する記録は長期にわたって記録されており、それらを用いた研究成果は、国内外で注目されてきた。本研究では、古典籍に記された京都の植物季節と古文書に記された諏訪湖の結氷日の情報を利用した気候復元を行う著名なお二方の先生に、これまでの成果と現在進行中のご研究にもとづく最新の知見を紹介していただく。

本会合は気象学史研究に関心を持つ、より多くの方の間の情報・意見交換をうながすため、学会員以外の方にも広く参加を呼びかけて開催する。

コンピナー・司会：財城真寿美（成蹊大学）

プログラム：

1. 古典籍の植物季節記録による京都の気候復元
青野靖之（大阪公立大学）

日本で書かれた古典籍には、開花や紅葉などの植物季節現象に関連する記述が多く残されている。日本の植物の生育は気温に大きく左右されることが多く、それらの記録を気温の復元を目的とした研究に役立てやすいといえる。植物季節現象は発生前1～3か月の気温などの影響を受けることから、復元対象となる気温もせいぜい月別平均値であり、他の方法による復元対象である年～夏・冬半年よりも対象期間が限定的であ

る。しかし、逆に月別の気温を復元できる数少ないアプローチとも言える。ここでは京都を例に、これまでの解析例を通して気温の復元推移の季節による違いに注目したい。

2. 579年間の諏訪湖結氷記録からみた長期気候変動
三上岳彦（東京都立大学）

長野県諏訪湖の結氷・御神渡記録は、1444年から現在まで579年間にわたり、ほぼ連続的に残されており、長期的な気候変動を議論するための有効なプロキシ（proxy, 気象観測データの代替として利用できる資料）として国際的にも関心が持たれている。従来、諏訪湖結氷記録に関しては、藤原咲平・荒川秀俊による「5世紀に亘る諏訪湖御神渡の研究」論文（Arakawa, 1954, Arch. Meteor. Geophys. B）が知られている。我々は、科研費プロジェクトの一環として、結氷と御神渡の発生日に関する神社等の古文書記録をすべて精査し、新たな諏訪湖結氷・御神渡日データベース（1444-2022）を作成中である。また、1980年代末以降、御神渡の発生頻度が激減しており、主たる要因である冬季の顕著な気温上昇について、半球スケールの気候変動との関連を考察する。

参加方法：

参加は無料です。参加を希望される方は事前申し込みをお願いいたします。申し込み方法等は気象学史研究連絡会ウェブサイト（下記）に掲載いたします。

<https://sites.google.com/site/meteorolhistoryjp/>

お問い合わせ：

上記ウェブサイトの問い合わせフォームをご利用ください。

山本 哲（研究連絡会世話人・元気象研究所）